

(図中のせりふ)

すがわら
菅原

でんじゆ
伝授

てならい
手習

かごみ
鑑

車引のだん

梅王丸

桜丸

かけ合せりふ

それへ行は梅王殿か　そう云声はさくら丸かヤレ／＼

そなたにあふて話したい事聞たい事先々これへ　早そく

ながら其方は宮姫君の御跡したひ尋ね行しと内宝八重の

物がたりシテお二方にめぐりあひしか　成程道にて追つき

奉つり菅丞相　御流罪と聞より安居の岸迄御供せしに

御対面叶はず御帰洛願ひの妨げと御二方の御縁も切れ

姫君は土師の里伯母君の方へ御出齊世様を供奉し奉つり

事治りしとは云ながら納らぬは我身の上賤しい身にて恋の

取持仕おふせしが仇と成御恩を受た丞相様御流罪に成せ給ひし

も皆此桜丸がなす業と思へば胸も張さくごとくけふや切腹あすや

命を捨ふかと思ひ詰は詰たれど佐太におはする一人の親人今年

七十の賀を祝ひ兄弟三人嫁三人並べて見ると当春より悦ひいさ

みおはするに我き人かけるならば不忠の上に不孝の罪責て御祝義

祝ふたと詮なき命けふ迄もながらへし面目なさ推量あれ梅王殿

ヲ、道理く我とても主君流罪に逢玉ふ上は

都にとゞまるはづはなけれど御館没落以後

御台様マのお行衛知れず先此方を尋ふか

筑紫の配所へゆかふかと

取つおいつ心ははやれど

其方がいふごとく親人の

七十の賀の祝ひも

此月是も心にかゝる

故思はず延引互ひ

に心は須弥大海

兄者人弟。

ぜひもなき世の

ありさま

じやなア